



建設地 : 札幌市西区
竣工 : 2024年12月
主な用途 : 専用住宅
用途地域 : 第二種中高層住居専用地域
敷地面積 : 64.07平米 19.38坪
建築面積 : 36.98平米 11.19坪
延床面積 : 71.46平米 21.62坪
構造階数 : 木造在来工法2階建
主な仕上 : 屋根: ガルバリウム鋼板
壁: 金属サイディング
屋内床・壁・天井: ラワン合板
写真 : 永井杏奈

「階層」スラブを立体的に積み重ね、限られた敷地から最大限の床面積を引き出す

階層と破れ

— hierarchy and fissure



「連鎖」により生まれた外観

階層

建蔽率いっぱい建てられた住宅密集地の小さな家。20坪弱の敷地でありながら、ガレージと土間が求められた。そのため1階の大半がそれらで占められ、2階だけでは居住スペースが不足する。一方で、3階建てにすればコストがかさむ。そこで、1階にわずかに残された床面をロフ

ト相当まで持ち上げ、上層に向かって連続する階層的なワンルーム空間とすることで条件内で最大限の床面積を確保した。梁下寸法は人が通れるぎりぎりまで調整し、まずは機能よりも先に、コンパクトで密度の高い矩形が現れた。

破れ

そのように導かれた矩形の外皮を“ピラリ”とめくった。建物の南北は隣地境界ギリギリまで迫るが、東西にはわずかな余白がある。その壁面を外側へ押し出し、さらに屋根面もめくり上げた。これらの“めくれ”は、空間をわずかに押し広げると同時に、光を拾うリフレクターとしても機能する。住宅密集地でありながら、周囲には小さな「視線のボイド」が点在していた。隣家上階のセットバック、猫の顔ほどの路

地裏菜園、それらに向かって視線の通り道をつくって、限られたボリュームの中でも奥行きと広がりを引き出そうとした。一つは、外皮を“ピラリ”とめくことで物理的に矩形の束縛から逃れようとする逸脱であり、もう一つは、卵の薄皮のように潜在する空間の領域に指先を入れて“むにょん”と内側から臨界点を押し広げるアプローチである。そのようにして、与えられた矩形という束縛に対して、小さな断裂を織り込んでいった。

連鎖

条件や制約、あるいは初期的な形式などをトリガーにして、即興的に展開するコンテナボラードダンスのように、与えられた状況に反射的かつ不可逆的にリアクションしながら、次の一手へと繋いでいく。

連鎖的に生まれる生成を引き受けて更新を重ねるうちに、小さな逸脱は連鎖し、意図を超えて現在の姿となった。



「破れ」外皮をピラリ、光のリフレクター



「破れ」隣家上階のセットバック

「破れ」のダイアグラム



fig1:制約



fig2:逸脱



fig3:境界の浸潤

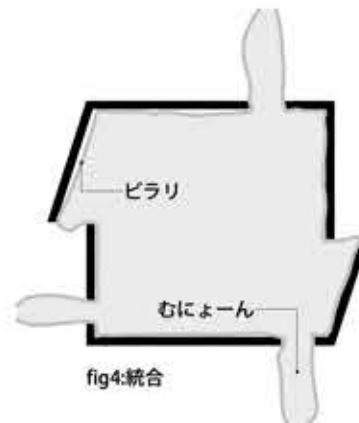
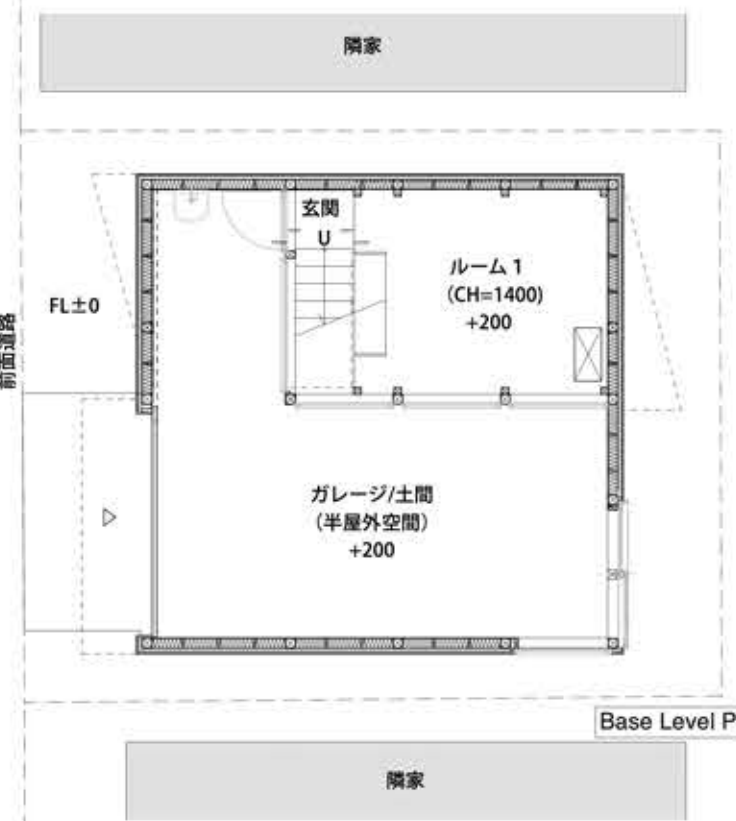
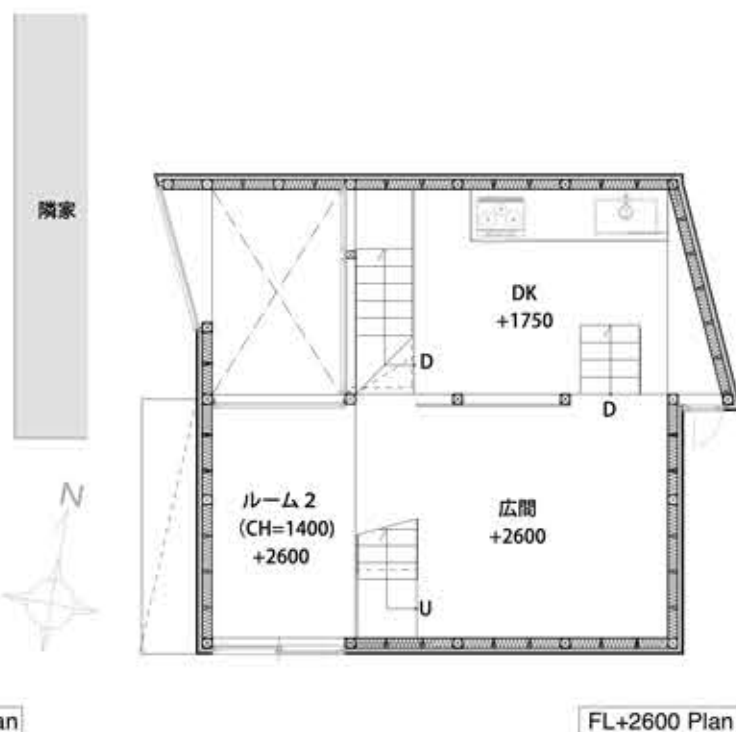


fig4:統合



Base Level Plan

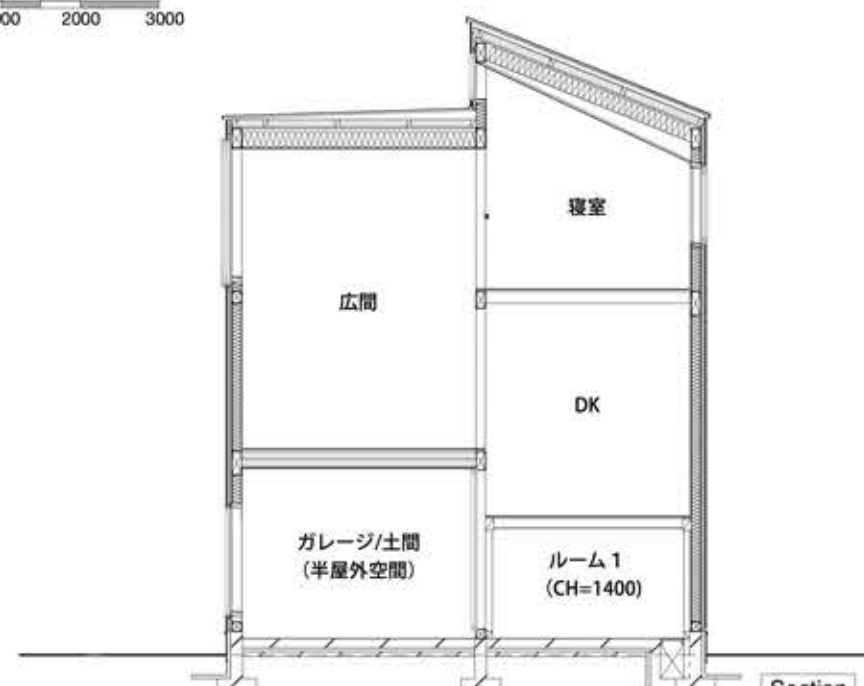


FL+2600 Plan



FL+4650 Plan

SCALE BAR
1000 2000 3000



Section